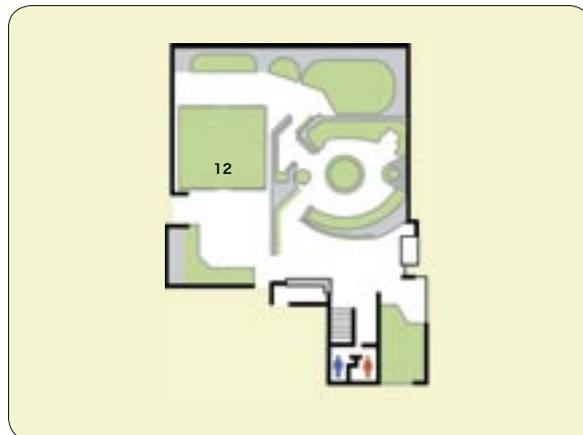


12 相模の家



●平塚の古民家

平塚市の古民家調査によれば、江戸時代に建てられた民家には、次のような特色が指摘できます。①民家様式はほぼ均一で、間口八間（一間＝約 1.8 m）、奥行き三間半～四間の二八～三二坪の家が標準的だった。②間取りは広間型三間取りといい、土間の他にザシキ・オク・ヘヤと呼ばれる3部屋をもち、明治後期に養蚕を行うようになってザシキを二分して四間取りとなった。二分された際、裏側の部屋はチャノマと呼ばれた。③棟の形式は直線的な直屋とL字型の曲屋があったが、直屋が一般的で、曲屋は後の改造と考えられるのが大半である。④土間とザシキ境の柱の省略が比較的遅く、一間ごとに柱が立っている。土間境の柱にはケヤキが使われ、土間周りにはチョウナ仕上げの柱もある。⑤ザシキは板敷で、イロリや神棚、押板と呼ぶ床の間状の施しがある。

この他、寄棟茅葺き屋根であること、柱は礎石立てであること、土間が広いこと、土壁であること、屋根地に竹を多用していることなどが古民家の特色として挙げられます。

●復元された民家

展示室に復元されている民家は、広川の窪田家旧宅の一部を移築したものです。博物館建設準備中に家を新築することになり、旧宅を寄贈してもらいました。移築したのは、デエドコロ（土間）とザシキの一部です。ザシキは本来は間口が三間ありましたが、展示では二間に切りつめて復元しています。また、ザシキの裏手は一間分が土間になっていましたが、展示では板の間に変更しています。土間をデエドコロと呼ぶのは市西部にみられる傾向で、市域では一般にニワと呼びます。ニワは、炊事場、貯蔵場、作業場として使用しました。

本来はザシキの右手にさらに四部屋あった五間取りの家で、間口が十間半（約 19 m）、奥行きが四間半（約 8 m）あり、四七坪ほどの大きな家でした。ナンドとナカノマの二部屋は一般の農家にはついていませんでした。ザシキには式台と呼ぶ正式な玄関があり、格式の高い家であったことがわかります。窪田家は江戸時代には村役人を務めたこともある家です。

式台玄関から出入りするのには特別な客で、ふだんは「ニワの入り口」とか「とんぼぐち」と呼ばれる入口から出入りしました。出入り口には大戸という重たい戸が入り、夜は大戸を閉めて小さなくぐり戸から出入りしました。裏口は、



旧窪田家住宅

